

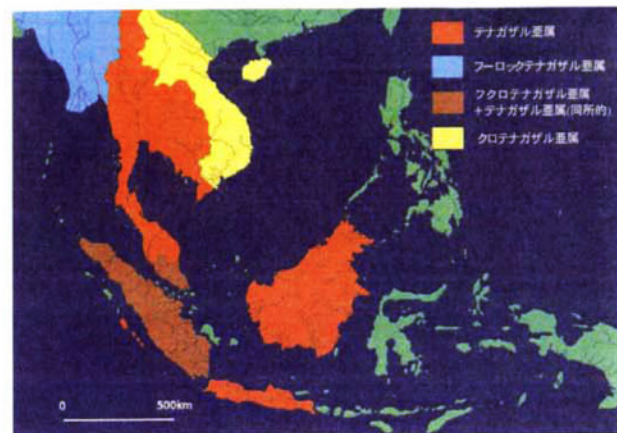


フクロテナガザル(オス)

01_テナガザルを手がかりに

人間は疑いもなく、霊長類に分類されるは哺乳動物の一種である。しかし、他の動物とは大きく異なるさまざまな特徴を持っている。言語もその一つであり、しかもことばなしには、私たちの祖先は文化・歴史・思索を築き上げることなど、とうてい出来なかつただろう。ことばの持つ大きな意味を感じる。一方で、言語の習得は人間に与えられた、いわば「宿命」であることも事実である。日常生活の中で、私たちはいやおうなしに話すことを学習するようになってきている。人間には、そういう本能が遺伝的に備わっているのだ。

では進化の過程で、いつどのようにしてことばは誕生したのだろうか。この問いに、実証科学で解答を出すのは、たいへん難しい。なぜなら化石は、行動の進化に関してはほとんど何も語ってくれないからだ。そこで現生の霊長類の行動に、モデルを求めることが重要となってくる。さらに具体的にはどの種のどのような行動が問題を解く鍵になるのかという



(図1) テナガザル亜属の分布
各テナガザル亜属は、東南アジアの熱帯雨林に生息している。同じ場所に異なる亜属が暮らし始めている場合もある。

問いが立つ。私たちは、テナガザルのデュエットと、その種分化に伴う空音にその答があると考えて研究を進めている。実はここからは、人間は音の組み合わせによってではなく、一連の音の流れを分割することによってことばを話すようになったのだという仮説が見えてきている。

02_テナガザルの進化を辿る

霊長類のなかで、人間にもっとも近いとされる類人猿は、大別してチンパンジー、ゴリラ、オランウータン、テナガザルの4グループから構成されており、テナガザルはその中で最も古い系統にあたる。テナガザルは、類人猿のなかでは最もその種類が多く、現在4亜属に分類されており、マレー半島、スマトラ島、ボルネオ島など赤道に近い東南アジアの熱帯雨林に生息している(図1)。

各テナガザルの系統関係は、あいまいな部分が多く、現在も様々な系統樹が提案されているが、4亜属の中でもっとも多様性に富んでいるテナガザル亜属の分岐は、比較的最近であると考えられている(図2)。本稿では、Geissmann(2001年)の論文にある系統樹を参考にして話を進めることとする。